



Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	諏訪, 正明
Citation	, 6, 1-16
Issue Date	2002-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59455
Type	book
File Information	hakubutukan6.pdf



[Instructions for use](#)



THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学 総合博物館ニュース

創基 125 周年特別展示記念号(2)

先人の夢

“先人の絢夢(ゆめ) 残れる原始林(もり)に 寮祭(まつり)の犠牲(にえ)の火柱(ほのお) 廻りて いざ寮友(とも) どちら永久(とわ)に謳歌(うた) わん意気と血潮の三年(みとせ)の契り” 予科3年の後に本科に移行した時代、昭和13年度の北大恵迪寮寮歌の一節、哀調を帯びた調べに清純なる魂をのせて、北斗に馳せた想いを若人は歌う。

往時の学生有志が執筆した入学ガイド「札幌農学校」(明治31年刊)は述べて明快、“それ一國教育の中心は必ずしもその政治的中心と一致せず。英国第一流の大学は必ずしもロンドンに在らずして、オックスフォード、ケンブリッジ、エジンバラにあり。その他列強有名の大学は必ずしもその首府に在らずして、反て偏僻の地に多き所以のもの、教育の中心と政治の中心とは、相一致するを要せざるを見るに足らん。”手稲の山並みを仰ぎ見る石狩の平原に位置する札幌の自然風土こそが大いなる人材育成に好適の地なることを江湖に知らしめ、数多の有為の青年を農学校へといざなつた。

かくして全国より集いし俊秀は多感の青春を大いなる自然に抱かれて学び、ある者は詩人に、ある者は画家となった。今も活発な活動を続ける「黒百合会」は有島武郎と当時の学生有志が作り、揺籃期の北海道洋画界に決定的影響を与えたのである。そして詩人たちの思いの一端は、今に至るまで毎年作られる寮歌に示

され、歌い継がれてきた。

今少し寮歌の一節を紹介しよう。“斗南の翼拡げては天地広しと誰か云う 雲より高きアンデスの裾野に友よ羊逐え 天に漲るアマソンの岸辺の森に斧を振れ(明治44年度)” “春雨に濡るるアカシア花 街路(とおり)の灯(ともし)はなやかに 地は銀鼠(ぎんねず)にたそがるる 寂(しず)かに歩む若人が 心にめざむ爽やかな 潤い充てる力かな(大正12年度)” “蒼空高く翔(かけ)らんと 暫しやすらう楡の蔭 力は胸に溢れつつ 翼つころう思かな(昭和2年度)” “遠く流離(ながれ)の春に来て 此の高樓(たかどの)に春愁(うれ)いつつ 郭公鳥(かっこうどり)の鳴くさえも 多感の児等の情懷(むね) 熱く 懐古の涙溢るべし(昭和14年度)” “時潮の波の寄する間を 久遠の岸に佇みて 不壊(ふえ)の真珠(またま)を漁りする 嗚呼三星霜(みつとせ)の光栄よ 緑の星を夢む 時 疎梢(こずえ)を払う天籟は 秘誦の啓示(さとし) 語るなり(昭和21年度)” “倒れたる友の姿を 忘るまじ我が胸に 恐ろしき雲空に充ち けがれたる祖国の山河に 新しき緑の息吹が 若者の槌音に和し もろ人の幸深めつつ この町にこだます日まで(昭和28年度)”

時代の変遷を反映し、主題、表現に変化はあるものの、通底する旋律は詩人たちの苦悩、感傷、憧憬、覇気を奏でて悲しいまでに純情可憐、歌う者の心情を瀟過して余りある。

ひとは他人の成し遂げた成果に驚嘆もするが、その人生の軌跡にこそ多くの示

唆を得る。研究者の学び育った時代とその文化を理解することの意義はこの点にある。寮歌は学生文化の貴重な結晶。先人の精神陶冶に強く影響したであろう寮歌を考察することは本学の学生文化の流れを理解し、先人の研究を理解する手だてとなる。

総合博物館では、学術テーマ展示、学術資料展示とともに、北大歴史展示が披露されている。クラーク精神あるいは農学校精神が本学のバックボーンとして今に生きていることを紹介しており、自ら示唆を受ける一助となることが期待されている。これを補完するものとして北大寮歌の考察は大いに有効であろう。近い将来、その考察展示が披露されることを願っている。

諏訪 正明
(館長/昆虫体系学)

目次

- ページ1: 先人の夢(諏訪正明)
- ページ2: 北大歴史展示「通底する精神」
クラーク精神の継承クラークを支えた若き外国人教師たち(西堀ゆり)
- ページ5: 北大歴史展示「通底する精神」
札幌農学校農学教室(1901年)
—復原模型製作を通して—
(池上重康)
- ページ7: 復元模型の製作について(角 哲)
- ページ9: 重要文化財「札幌農学校第2農場」
平成14年度春季公開—札幌農学校時代の輸入農業機械について
(端 俊一)
- ページ11: サハリン考古学の最前線
(ワシリエフスキー, A.A.
デチャーヒン, O.IO.)
- ページ14: 各種事業報告

Nov. 2002

ISSUE 6

2002年11月発行

北海道大学総合博物館

クラーク精神の継承 —クラークを支えた若き外国人教師たち—

「北海道大学の歴史125年に通底する精神は？」と問われれば、誰もが異口同音にクラーク精神を挙げる。開拓者精神、全人教育、国際性とその広大かつ高邁な大志の系譜は北海道大学の歴史125年そのものであった。確かに、その精神は偉大であった。

だが、ここで、ふと素朴な疑問が湧き上がる。どんなに偉大な精神であっても、僅か8か月足らずの滞在で、これほどまでに学生達に浸透するであろうか？ しかも、有名な内村鑑三や新渡戸稲造は第2期生で、1年足らずで本国へ戻ったクラーク博士の教えを直接受けてはいないのである。

この素朴な疑問から、北大歴史展示の中に「クラークを支えた若き外国人教師たち」の系譜を加える作業が始まった。その重要性の割にはあまり脚光を浴びることのなかった彼等の業績を見直し、通底する精神への貢献に光を当てたいと願ったものである。

では、一体何者なのであろうか、その

教えを伝えたのは？その謎を解くのが、この一群の若い人々である。

この若き外国人教師達がクラークの教育理念を受け継ぎ、それを花開かせたのである。彼等が作り上げていったカリキュラムは、クラークがマサチューセッツ農科大学で目指したscientific agriculture（科学としての農学）、知育・徳育・体育の全人教育、ピューリタニズムによって貫かれていた。通常の英語の授業の他に、外国人教師達による専門科目の講義も全て英語で行われた。今で言うESP（English for Specific Purposes）の英語学習であった。すなわち、医学英語や工業英語のように、専攻する学問や将来従事する職業に必要な知識を英語で学習させる方法であった。このような教授法で少人数教育を行っていた当時の教育は極めてレベルが高く、それを維持する教師達の努力は如何ばかりであったろうか、驚嘆に値する。

彼等は皆クラークに直接伴われて、あるいは推薦されて、札幌農学校に赴いた

若き少壮の研究者達であった。当時50歳の壮年であったクラークは、札幌農学校に赴任するにあたって、自ら学長をしているマサチューセッツ農科大学の優秀な教え子達を伴ってきた。ホイラー24歳、ペンハロー22歳、そして、ブルックス25歳であった。その後、マサチューセッツ農科大学の卒業生（カッター27歳、ピーボディ23歳、ストックブリッジ27歳、ブリガム32歳）が次々と着任、札幌農学校の基礎を築いていった。これら教師達は本国アメリカでも将来を嘱望されていた優秀な若者達であった。その優秀さは後年母国へ戻ってからの彼等の社会的活躍からも容易に窺われる。地の果てとも思える東洋の異国の地に赴いたその勇気は正真正銘のフロンティア・スピリットではなかったろうか。彼等は1877年のクラーク帰国後も、札幌の地に留まり、最後の教師ブリガムが去る1893年まで、札幌農学校の学生達の育成のみならず、北海道の農業・土木・医療等の発展に多大な貢献を行っている。



若き米国人教師とその妻たち

左から、カッター・ホイラー・ペンハロー夫人・ペンハロー・ホイラー夫人・ブルックス・ピーボディ 1879年撮影

(北海道大学図書館北方資料室蔵)

クラークを支えた若き外国人教師たち（※はマサチューセッツ農科大学の卒業生）

クラーク（William Smith Clark）（農学、化学、英語）[50歳・アメリカ]

1876—1877 1886（クラーク死去）

ホイーラー※（William Wheeler）（土木学、数学、英語）[24歳・アメリカ]

1876—1880

ベンハロー※（David Pearce Penhallow）（化学、植物学、農学、数学、英語）[22歳・アメリカ]

1876—1880

ブルックス※（William Penn Brooks）（農学、植物学）[25歳・アメリカ]

1877—1888

カッター※（John Clarence Cutter）（生理学、比較解剖学、英文学）（他に、獣医学、水産学、動物学）[27歳・アメリカ]

1878—1887

ピーボディ※（Cecil Hobart Peabody）（数学、土木学）[23歳・アメリカ]

1879—1881

サマーズ（James Summers）（英語）[51歳・イギリス]

1880—1882

ストックブリッジ※（Horace Edward Stockbridge）（化学、地質学）[27歳・アメリカ]

1885—1889

ヘイト（Milton Haight）（物理学、数学、英文学）[32歳・カナダ]

1888—1892

ブリガム※（Arthur Amber Brigham）（農学）[32歳・アメリカ]

1888—1893

札幌農学校の教育の特徴は教師達の緊密な連携にあった。よく比較されるのが東京大学（前身の開成学校）である。ここに赴任した教師達は様々な出身地から来ており、個々に教育と研究に高い資質を示したが、教育カリキュラム全体のまともりは比較的少なかったと言われる。他方、札幌農学校の外国人教師達は、そのほとんどがアメリカ・マサチューセッツ農科大学出身の20代の若者達であった。クラークを支え、クラーク精神を継承した彼等の心は新天地に新しい大学を創生しようとするフロンティア・スピリットに満ち満ちていた。地の果てに「知のフロンティア」を築く—その熱き思いに、生徒が応えぬわけではない。ピューリタニズムと全人教育の精神に貫かれた札幌農学校はユニークな教育・研究機関として異彩を放っていた。

この創生の心意気はそもそもマサチューセッツ農科大学にその源を発していた。クラークはアマースト大学の教授であったが、州立農科大学をアマーストに誘致するのに尽力、その功が認められ、1867年に第3代学長に選ばれた。この州立大学としての学風が札幌農学校に大きな影響を及ぼした。

当時アメリカでは、モリル法（1862年）によって多くの州立大学が誕生していた。これは工学や農学を専門とする州立大学を設立する州に対して国有地を無償で与えるよう定めた法律であった。その目標とするところは、科学教育と古典教

育の両方に力を入れながら、兵学も取り入れ、勤労者階級の師弟に農学と工学を教えることであった。マサチューセッツ農科大学を初めとして多くの州立大学が設立された。

この農学とリベラル・アーツ（liberal arts：一般教養）の重視という学風は北海道開拓のために設立された札幌農学校にはふさわしいものであった。クラークはマサチューセッツ農科大学のカリキュラムを導入し、そこで教育を受けた卒業生達を教師として迎えた。札幌農学校の全人教育はこのようにして生まれたのである。

勤労者階級の師弟教育のための大学を創生したクラークの気概は札幌農学校への思いと重なったことは容易に推察される。札幌農学校開校の祝辞で、クラークは「長年東洋の諸国を暗雲の如く覆っていた階級や因習という暴君から解放することこそが、教育を受けた学生達の胸に大志を抱かせるものなのだ。」と述べている。

This wonderful emancipation from the tyranny of caste and custom, which in ages past has enveloped like a dark cloud the nations of the East, should awaken a lofty ambition in the breast of every student to whom an education is offered.

マサチューセッツ農科大学での気概が

彼とその愛弟子達を東洋の果てに導いたのであることは想像に難くない。

創生時のマサチューセッツ農科大学の心意気を語る時、ポート部優勝のエピソードは欠かせない。奇しくも、優勝した1871年はクラークが伴ってきた最初の教え子ホイーラーが卒業した年でもあった。

無名の田舎大学が著名な名門校ハーバード大学、ブラウン大学を破る！1871年のポートレースでの優勝はセンセーショナルであった。当時の新聞は「Amherst farmersがHarvard boysを破る」と書きたてた。クラークが学長になって4年目の快挙にアマーストの町の人々は大喜びしたという。だが、もっとも喜んだのは学長クラークその人であったろう。農科大学が学生を受け入れたのはクラークの代からであったから、文字通りクラークが育てた学生たちの快挙であった。就任4年目の学長クラークの意気揚々たる様子が当時の新聞『The Amherst Record』に載っている。

The happiest man in town on Saturday was President Clark, who has been from the start perfectly sanguine of the success of his boys. Amherst people universally rejoiced that the students of her favorite college had done something to let the world know there was such an institution as Massachusetts Agricultural College, and that she did not propose to

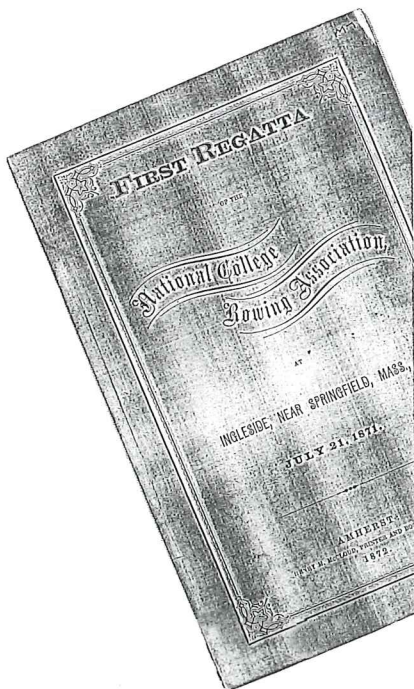


ボートレースで使用されたと伝えられる舟の木片：マサチューセッツ大学図書館蔵

follow, but to lead.

「土曜にもっとも幸せだったのはクラーク学長であった。彼は最初から学生たちの勝利をまったくもって確信していた。アマーストの町の誰もが自分達の大学の学生たちが『マサチューセッツ農科大学ここにあり』と世に知らしめ、また、他の大学の後塵を拝するのではなく、堂々と先頭立つことをやってみせたことを大いに喜んだ。」

1871年7月21日イングルサイドで行われたボートレースで使用されたと伝えられる舟の木片が、現在、マサチューセツ



1872年出版の小冊子の表紙と内容記事

ツ大学図書館に保管、展示されている。卒業生の所蔵品が1924年に大学図書館へ寄贈されたものである。

また、当時の記録がマサチューセツ大学図書館古文書館に残されている。優勝の翌年、1872年に出版されたFirst Regatta of the National College Rowing Association at Ingleside, Near Springfield, Mass., July 21, 1871という小冊子である。

今回の展示のため、専門職員のマイク・ミレウスキー氏から多大のご協力を頂き、複写を許可して頂いた。これは当時の優勝を伝える新聞記事を全て集めて小冊子として出版したものである。これらの記事には、伝統あるレガッタで田舎の若者が上流階級の師弟を破ったという文字が至る所に踊っている。

〈New York Tribuneの記事から〉

Broad-shouldered, wellmuscled, but no style, no training, no azure blood

〈Boston Heraldの記事から〉

The result of the College race at Ingleside, yesterday, is rather destructive to Dr. Holmes' favorite theory, that the Brahmin blood and city living are bound to win when pitted against country bone and muscle.

〈Hartford Courantの記事から〉

Or, to put it in another way, culture

23

it was sly Josh Ward, expected such a thing. They have vindicated the old farm's reputation, and taught anew the lesson of simple fare, natural hours, sound constitutions and free airs from all quarters of the sky. The ruddy fellows deserve to have their ribbons worn on the breast of every fresh and healthy girl in the land. The home lads prove the lads to wear, after all, whether it is the plow or oar they take in their hands. 'Rah! 'Rah!

[EDITORIAL FROM THE BOSTON HERALD.]

THE BRAHMIN'S DEFEAT.

The result of the College race at Ingleside, yesterday, is rather destructive to Dr. Holmes' favorite theory, that the Brahmin blood and city living are bound to win when pitted against country bone and muscle. The country bumpkins "cleaned out" the Brahmins yesterday very handsomely, making the best time on record. Dr. Holmes has an idea that a city boy about five feet high, weight one hundred and eleven pounds, more or less, if he happen to have the blue blood in his veins, can "lick" the country rustic of six feet in a twinkling; but you know how it is yourself.

[EDITORIAL FROM HARTFORD COURANT.]

THE AMHERST FARMERS.

The Amherst farmers have beaten the Harvard boys, who are in a sense amphibious animals, having their home by the sea, and counting to believe by a long series of victories that they are the masters of the sea as well as of all fresh water ponds. The land lubbers (the term is technical and not insulting) have rowed the sea dogs out of the water. Or, to put it in another way, culture and breeding have gone down before muscle and practice. Of course it is ridiculous that these farmers at a college of agriculture, who are not within three miles of water enough to swim in, should come out as tip-top aquatic performers, and carry off flags, cups and honors from the traditional rulers of the oar, who had only condescended to come into the country to make a holiday for the bar-



ミレウスキー氏、ハイディ夫人と筆者

and breeding have gone down before muscle and practice.

これらの行間からは、新興の田舎大学が受けていた侮辱的な言動が見え隠れする。都会の一流大学と呼ばれていた大学を破った喜びはどんなに大きなものであったろうか。「大学を創り、学生を育てる」、教育者クラークの喜びを象徴する一件であった。

この快挙から5年後、第1期生のホイラーと共に札幌の地に赴いたクラークの胸中にはこの時の歓喜が思い出されていたことであろう。そして、若き外国人教師達もまた同じ思いを胸に抱いていたに相違ない。この建学の精神を東洋の果てに再現しようとする彼等のひたむきな思いが当時日本でも独自の地位を築く大学を作り上げたのであろう。地の果てに「知のフロンティア」を築く—その後の札幌農学校の卒業生達の活躍は、彼等がその熱き思いに応えた証拠に他ならない。

是非博物館に足を運んで、この熱き思いの交錯する歴史ドラマに直に触れて頂きたいものである。そして、願わくば、北大キャンパスに学び、教える者、皆等しく、この通底する精神を継承していききたいものである。

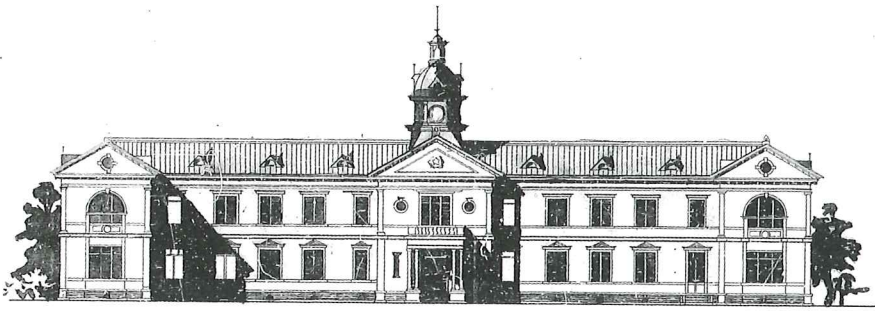
参考文献

- 『お雇い米国人科学教師』 渡辺正雄(講談社)
- 『札幌農学校と英語教育』 外山敏雄(思文閣出版)
- 『お雇外国人』 札幌市教育委員会編(同委員会出版)
- 『北大 百年の百人』 北海タイムス社編(同社出版)
- 『北大百年史 通説』

西堀 ゆり

(言語文化部 教授/応用言語学・英語教育)

北大歴史展示「通底する精神」 「札幌農学校農学教室（1901年）」—復原模型製作を通して—



札幌農学校農学教室 正面

はじめに

昨2001年末に『写真集北大125年』が刊行された。すでにお手に取られてご覧頂いている方も多いと思う。筆者はその編集作業に関わったが、専門である建築史的視点から、キャンパスの変遷および建物（校舎）の変遷に焦点をあてて、北大の125年間の歴史を綴っていった。こういった編集方針が許されたのは、100年前に北1条（現札幌時計台周辺）から現在地に移転して以来、キャンパスの移転・分散が少なく、農学部、理学部をはじめとする本学の歴史を語る建築が今なお多く残されていることに依拠するところが大きい。写真集の編纂作業の際には、本学事務局に所蔵されている建築図面を大いに活用した。この資料なくしては、写真集の完成はなかったといっても過言ではない。

1. 建築一件書類の整理・保存、活用

本学所蔵の建築図面の整理・活用については、山後正憲「後期札幌農学キャンパスの史的的研究に関して」（『北海道大学125年史編集室だより』第3号、pp.10-16、2000年3月28日）、および、拙稿「大学所蔵資料の整理・保存と活用について—建築一件書類を主とした各大学の取り組みと今後の展望—」（『北海道大学125年史編集室だより』第5号、pp.5-10、2002年3月30日）をご参照いただきたい。

前者では、この建築図面を基礎史料に旧札幌農学校図書館読書室・書庫のCG（コンピュータ・グラフィクス）復原を行なったこと、また、建築簿書も参考にして、古河講堂の屋根葺材の復原考察を行なったことがなど書かれている。後者では、大学アーカイヴスとしての建築一件書類（建築図面・簿書）の位置づけ、および、本学と他学における建築一件書

類の整理・活用事例を報告している。

本学所蔵の建築一件書類に関しては、札幌農学校時代の1899年（明治32）のキャンパス移転から、東北帝国大学農科大学時代を経て、北海道帝国大学昇格直前の1918年（大正7）までのデジタルアーカイヴス化が、総長裁量経費の研究助成を得て完了し、4枚のCD-ROMにまとめることができた。将来的にはホームページによる公開を予定しているが、技術的な問題もあり、現時点では作成ならびに公開を見合わせている。

2. 復原模型作成の意義

デジタルアーカイヴス整備に本格的に取り掛かる少し前の2000年夏に、本学創基125周年総合博物館特別展示の一環としてキャンパス内の建築模型製作を依頼された。

先に述べた現キャンパス草創期の校舎建築の図面に加え、本学事務局にはざっと調べただけでも優に2500葉を超える北海道帝国大学時代の建築図面が

保管されている。それらを概観した上で、博物館展示として意義のある復原模型は、どの施設であるかを検討した。

事務局（旧予科講堂）、農学部、理学部（総合博物館）、旧札幌農学校昆虫学及養蚕学教室や旧図書館、古河講堂（旧東北帝国大学農科大学林学教室）など現存する建築は、単体の模型製作と考えた場合、建築本体が現存しているだけに失われた建築に比べると復原の意義は弱くなる。また、旧工学部校舎（通称白亜館）や旧医学部の木造時代の施設群は規模的に大き過ぎ、限られた展示スペースに収まらないという理由から模型製作が見送られた。そこで候補にあがったのが、現キャンパスに移転して最初に建築された旧札幌農学校農学教室であった。この校舎は、1935年（昭和10）に現農学部本館が新築されるにあたり取り壊された。そのため、米寿に近いがそれ以上の農学部卒業生以外はほとんど知らないという実情があり、本学同窓生にその存在をあまりよく知られていない。

この建築の復原の意義は何か。大きな理由のひとつは、帝国大学への昇格を見越して行なわれたキャンパス移転施設群の中心をなす建築—換言するならば、現在の本学の源流—と見做しうることである。『札幌農学校』（札幌農学校学芸会編、1902年）所載の「札幌農学校改築教室予定図」を見ると、その様子がよくわかる。西端の農学教室中央から延びる東西軸を中心に、東から

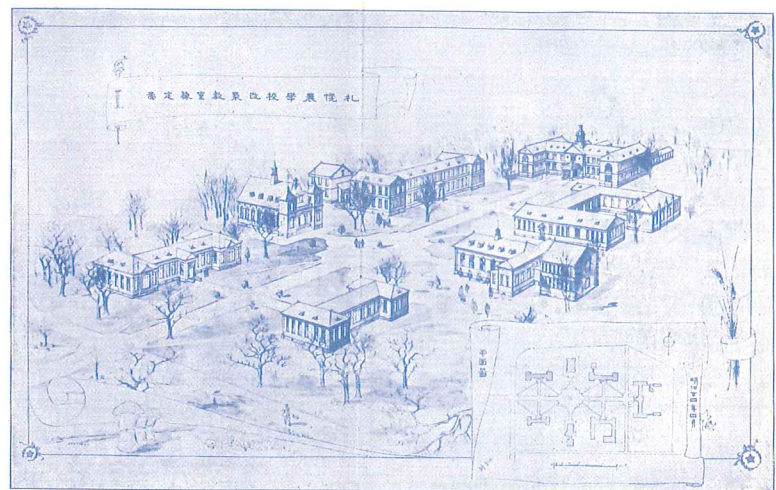


図 改築教室校舎期

「札幌農学校改築校舎予定図」



「農学部風景」

西に向かって、南側に農業経済学及森林学（後に農政学）教室、大講堂、動植物学教室、北側に昆虫学及養蚕学教室、図書館（読書室）・書庫、理化学及地質学（後に農芸化学）教室を配置している。対となる建物同士でデザイン要素を共有することにより、農学教室から延びる東西軸をより一層意識させている。権威的象徴性を強めるため、最も大きな規模で、時計塔や車寄せをもつ姿でデザインされたのであろう。

また、農学部長室内に飾られている、森岡史郎（当時工学部学生）による1928年（昭和3）当時の北大キャンパスの油絵にも、唯一西を正面にした農学教室が象徴的に描かれている。

もう一つの理由—こちらはいささか消極的な理由になるが—は、「予定図」に見られる建築のうち、実現しなかった大講堂を除いて、唯一農学教室だけが、現在に何も痕跡を残していないことである。昆虫学及養蚕学教室と図書館・書庫は現在地にほぼ当時のままの姿で建ており、農芸化学教室に関しては講堂の一部が旧図書館の前面に閲覧室として移築され、動植物学教室は植物園内に「宮部金吾記念館」として一部東翼が移築されている。農業経済学及農政学教室は保存建物としてサークル会館に使われていたが、1979年（昭和54）4月に失火焼失した。現在は百年記念館の展示スペースに玄関レリーフのみが保存されている。

今回、復原模型が完成したことにより、これまで、わずかな写真や絵でしか知ることができなかった農学教室の威容を、当時の教官や学生達と同じく実感することができる（ただし、自身のスケール感

を1/40に落とさなくてはいけないが）。蛇足になるかもしれないが、模型製作がちょうど、農学教室の竣工から100年後であったことも理由のひとつとして加えておく。

3. 設計者中條精一郎と施工者

プロレタリア作家宮本百合子の父として知られる中條精一郎（1868～1936）は、1898年（明治31）東京帝国大学工学部建築学科を卒業、翌年から1902年まで文部技師として同省大臣官房建築掛札幌出張所へ赴任した。文部技師時代の主な活動は、札幌農学校校舍群の

設計で、他に東京帝国大学医科大学、京都帝国大学福岡医科大学（現九州大学医学部）の設計にも関わった。

前出の「予定図」は中條自身によるスケッチと伝えられ、さらに中條が関与した後期札幌農学校の6教室の設計図面59枚が本学事務局に所蔵されている。内訳は農学教室図面15枚、動植物学教室12枚、昆虫学及養蚕学教室6枚、農業経済学及森林学教室9枚、図書館・書庫5枚、理化学及地質学教室12枚である。このうち大半の図面にはドラフトマン（製図浄写）である木村長助の印があるが、農学教室の図面だけは、その印がなく、烏口の線もシャープで着彩も美しい。植物園内博物館の簿書（1900年）中にある唯一中條の印を確認できる図面と同様の繊細な図面表現であることから、農学教室の15葉の図面は

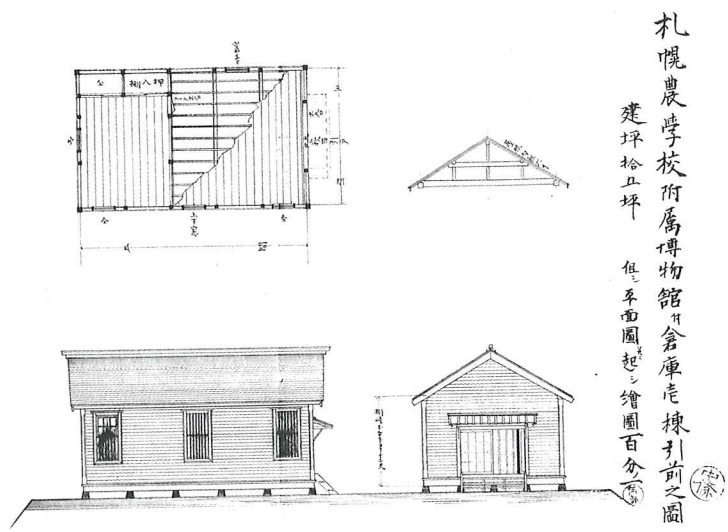
設計者中條精一郎自らが描いたものであると考えている。

ところで中條は、1903年から英国へ留学、1908年には同窓の先輩である曾禰達藏とともに曾禰・中條建築事務所を開業した。この事務所は戦前期の日本で最も多くのオフィスビルを建てた建築事務所としても知られている。事務所時代に中條は、設計よりも建築家の社会的地位向上のため建築士法制定運動に尽力した。彼の代表作には、郷土山形の県庁舎および県議会堂（1914年）、岩崎熱海別邸（1935年）などがある。

設計者の影に隠れてしまいがちだが、施工者なくして建築は完成しない。ましてや北海道に開拓の鋏が入って、わずか30年後のことである。この農学教室の建築は、北海道において最初の中央の建築家設計による本格的洋風建築であるといっても過言ではない。開拓使時代のアメリカ人技師による建築技術の導入とその消化なくして、この事業の遂行はなかった。その大役を最初に担ったのが、石狩国札幌郡豊平村（現札幌市豊平区豊平）在住の請負業者阿部幣治であった。総工費40,514円65銭で落札、1900年（明治33）8月7日に起工し、当初予定の翌年9月18日より3か月近く早い、6月15日に竣工した。阿部は他にも、動植物学教室、理化学及地質学教室、図書館読書室・書庫、そして植物園内にある博物館事務所の請負工事を行なっている。なお、阿部については未だ不明な点が多く、今後さらに調べる必要があることを申し添えておく。

4. 農学教室の建築的特徴

農学教室は、中央に八角形の時計塔を戴せ、正面中央にトリプルコラム（3本



札幌農学校附属博物館并倉庫棟引前之図
建坪松丘坪
但平面圖起シ繪圖百分

「札幌農学校附属博物館并倉庫棟引前之図」
図面右下に中條の丸印が見える

の円柱)で支える車寄せを配する。南北両翼をもつH型の平面構成である。1階の開口部には側面の一部を除きすべてにペディメント(三角形の切妻破風)を載せるが、2階の開口部にはペディメントは見られない。翼部正面に見える窓開口や正面玄関の扉装飾、時計塔の屋根窓など細部の意匠は繊細だが、ペディメントを配置することにより安定感が表現され、後期札幌農学校の中心的な建物として意識された設計意図を感じ取ることができる。

5. むすび—今後の展示の可能性—

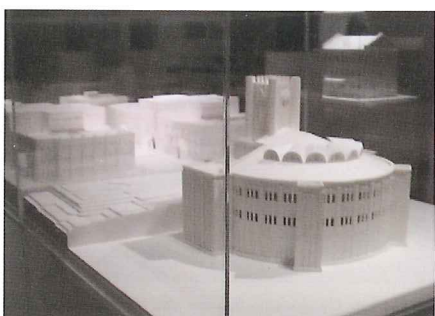
現時点では農学教室一棟のみ復原模型が製作されただけで、しかも、その製作意義や背景を説明するパネルなども展示として用意されていない。本稿がとりあえずは、その代役を務めることになるのであろう。

別稿でも紹介したが、東京大学総合博物館小石川分館では、震災被害で失われた明治・大正期校舎の詳細な着色図面と木製の復原模型を並べて展示し、さらに安田講堂付近のキャンパス配置模型も作成展示している。

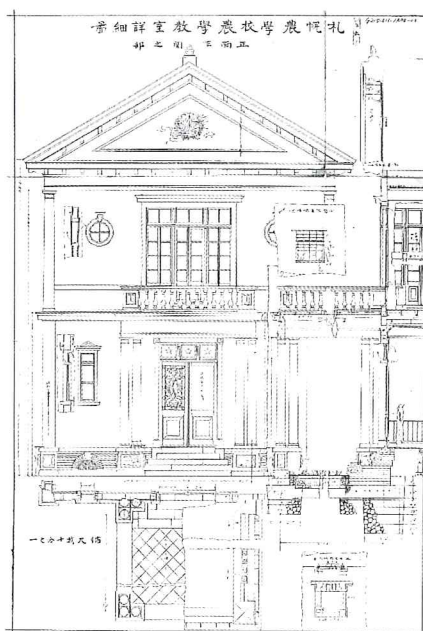
本学には、それに比肩し得る(あるいは凌駕するかもしれない)だけの歴史的資料がある。さらには、植物園内施設、第二農場施設といった重要文化財や、古河講堂をはじめとする登録文化財の施設が多くキャンパス内に残されている。なにより中央ローン、農学部前庭、エルムの森といった草創期のキャンパスの様子を今なお偲ぶことができる。つまり、模型により復原された空間と現状の空間とのオーバーラップが可能なのだ。

「農学教室の次に復原したい建物は」と聞かれたら「中央講堂」と答えたい。かつて、総長選挙など多くの公式行事がここで行なわれた。古希を迎えた卒業生にとって、ここは卒業証書を受け取った思い出深い場所でもある。外観だけでなく内部も見られるよう復原すると一層楽しい展示になることだろう。

復原模型を縮小されたものと侮るなか



東京大学総合博物館小石川分館展示



「札幌農学校農学教室模型詳細図」
正面玄関周りの詳細図面

れ。ここまで拙文を読んでいただき、さらに農学教室の模型の前に立つ機会がもしあるのなら、是非、視点を当時の学生の高さ(模型の1階の窓の位置)にもって行ってほしい。圧倒的なスケール感で



農学教室模型 玄関車寄せ前から見上げる

模型が語りかけてくるはずである。

この道を新渡戸稲造や有島武郎も歩いたのだろうか。想像は尽きない。

池上 重康

(工学研究科・助手/建築史)

復元模型の製作について

1. はじめに

旧札幌農学校農学本館の復原模型は、工学部建築史意匠学研究室の8人を中心に、約3週間で製作した。当研究室では1998年に旧札幌区役所復原模型(協力:読売新聞社北海道支店、札幌市資料館に寄贈)を製作しており、当時製作に関わった2名が指揮をとった。主な材料は5種類の厚みのスチレンボードおよび様々な厚さのケント紙である。こ



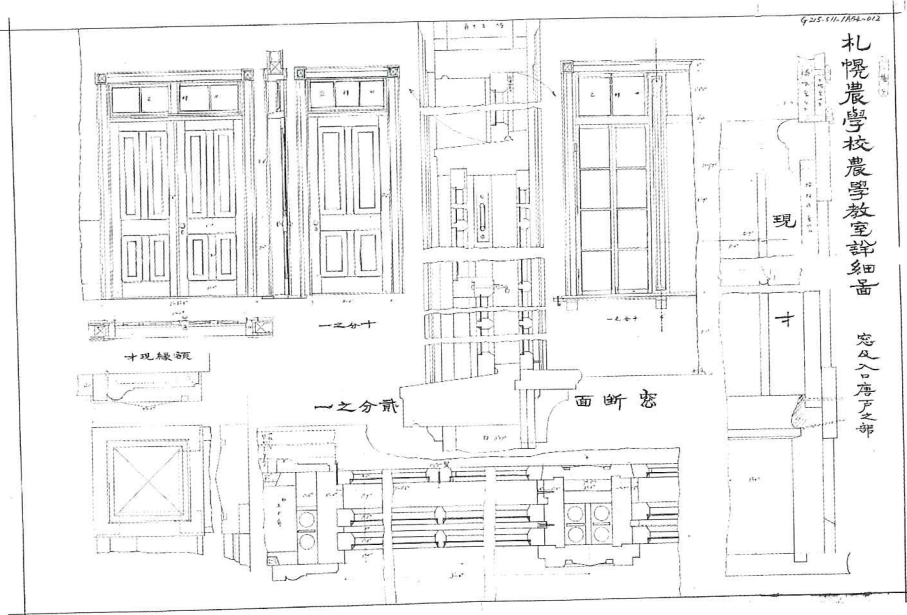
札幌農学校農学教室模型正面詳細

れ以外に、巻段ボールやスチレン製の棒、虫ピン、ビニールパイプ、紙ヤスリなどを用いた。

模型は当初、30分の1での完成を予定していた。しかし、仕上がり寸法が畳大の土台に収まらないこと、また、土台を継ぎ足した場合、予想される模型重量に耐えうる強度を保てないとの判断から変更を余儀なくされた。この際50分の1という標準的な縮尺も検討されたが、詳細の再現精度の低下を回避するため40分の1と決定した。

製作に先立ち、大学保管図面をCAD(Vector Works 8.0)で書き直した。図面では判断のつかない詳細部に関しては古写真や同時代の建築、中條精一郎設計の他の建築も参考にした。CADによる図面は誤差が小さく、原寸大での検討が可能ということが一つの利点である。これにより、完成模型の全体から細部に至るまでの検討が図面上で可能となった。また、この作業で全ての製作寸法と部位毎に用いる材料を決定した。

実作業では、壁や屋根などの躯体製作と、窓や柱、時計塔、玄関車寄せ、ペディメント(破風)などの細部製作に行程を分けて製作を進めた。



設計図面（建具詳細）
これを元にCADにより模型製作用図面を作成

2. 製作過程の概要

躯体は主棟と両翼、屋根下地を別に組立てた。壁は窓を埋め込む部分を切り取って組立てた。躯体内部には補強材が組み込まれている。これらを作成した土台（畳1帖大のベニヤ厚板と3cmの角材で作成）に木ネジで固定した。次いで躯体に窓、玄関車寄せ、時計塔、持ち送り、基礎など大小の部材を付加した後に屋根を載せ、最後に瓦を模した屋根を葺いた。仕上げに3度の塗装を施した。

3. 詳細部の製作

出隅部にある角型のピラスター（付け柱）や正面性を強調するペディメント、両翼正面の半円形欄間付きの窓を含めた8種の窓など、建物を特徴付ける固有の部材はスチレンボードとケント紙を重ね合わせて作成されている。一方、7種類の窓、玄関ポーチの、持ち送りなど形態が重複する部材は、時間を短縮するためシ

リコンで型を取り、ウレタン樹脂で量産した。原形となる窓、持ち送りは前述の方法によって、柱は木材をけずり出して作成されている。

ベランダ付きの玄関車寄せのうち、床の部分はケント紙をけがいて目地を入れている。また、トリプルコラムの台座などのルスティカ（荒石）積みの質感は荒めの紙ヤスリにより表現した。

建物の顔となる時計塔は2mm厚のスチレンボードを重ね合わせて骨格を作り、仕上げにケント紙を全体に貼った。時計の文字盤は詳細が不明であったため、先行して建築されていた旧札幌農学校演武場（1878年、時計塔は1881年、通称「札幌時計台」）のものを転用することにした。

屋根瓦には梱包用ダンボールを用いている。瓦の標準寸法の $\frac{1}{4}$ が約6mmであり、リプ山のピッチがこれに相当するものを選択した。最初に段ボールの目を片方に

流れるように押し潰し、瓦の葺き足寸法に合致するようにカッターで切れ目を入れた。軒先の巴瓦には真鍮釘を用いた。また、棟瓦はスチレン製の丸棒を半分に切り、ビニールパイプを細く切ったものを付加し冠瓦を模している。

4. 塗装

模型はサーフェイサーという白色の下地生成スプレーにより白く塗装されている。当初、色の復原考察を行ない着色することもあるが、今回は復原であり、かつ得られた資料だけでは彩色の再現は不可能であった。しかし形態の復原という意味では、抽象的な効果を発揮する結果になったのではないが。

5. むすび

以上、製作に関する概要を記述したが、実際の建築工事と概ね同様の行程を経ていることを強調しておきたい。また、実工事と同様と言いながらも、模型であるが故の、躯体強度に対する配慮や、収まり寸法に対する検討も重ねられている。詳細がデフォルメされた部分があることも否めないが、縮尺と全体のバランスを考慮した故と好意的に解釈して頂けたら幸いである。

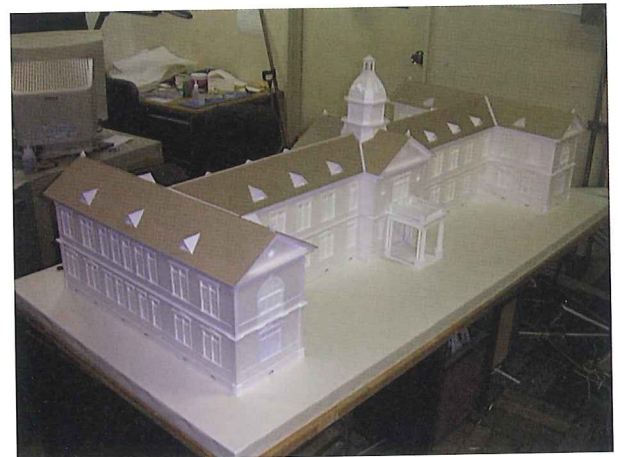
最後に、模型の製作機会を与えてくださった丹保憲仁前総長と越野武名誉教授（現札幌大学教授）にこの場を借りて謝意を表する次第である。

角 哲

（工学研究科／博士後期課程）



組み立て前の模型の様子



完成一歩手前 残る作業は塗装のみ
屋根面にダンボール素材の色が見える

重要文化財「札幌農学校第2農場」平成14年度春季公開 札幌農学校時代の輸入農業機械について

平成14年大学祭に協賛して、重要文化財「札幌農学校第2農場」の春季公開が6月7日から9日の3日間行われました。公開内容は、模範家畜房（モデルバーン）と穀物庫（コーンバーン）の内部に

「農場および農場畜産の歴史」
「北海道開拓と農機具」
「日本・世界の鋏」

のテーマで、種々の文書、資料、農機具などを昨年の125周年記念臨時公開（総合博物館ニュース第5号に掲載）と同様に展示しました。3日間での入場者は353名で、75%が札幌市在住者、4%が札幌以外の道内者、20%が道外者、1%が海外からの人達でした。

「モデルバーン等の一般公開に関する専門委員会」では、今年度より年2回の一般公開を実施することとし、その1回目を大学祭期間、2回目を10月上旬に予定しました。より充実した公開内容にすべく毎年整備を進めながら、この公開を定着させたいと思っています。

「札幌農学校第2農場」の建物は貴重な歴史的建造物ですが、当時輸入された農業機械・機具も貴重な歴史遺産です。モデルバーンの2階には、これらのうちの主要なもの100点余を展示しています。

官園から移管された農業機械

札幌農学校の開校に当たってクラーク博士は、農業教育には実践が必要と考え、「開拓史札幌官園」を農学校農場（college farm）として移管を受けました。この時、200エーカーのコーンと100エーカーの牧草耕作のために必要な農業機械・機具として、44種154点をリストアップしています。農場発足から2週間後の1876年9月27日には、家畜・農業機械・機具の正式な移管要請書がクラーク農場長名で、堀基（開拓史中判官）宛に提出されています。それには、畑を耕すための機械、トウモロコシや小麦の播種機、草刈り機、小麦収穫機など、20種40点の農業機械と、スコップや西洋鎌など10種106点の機具が挙げられています。官園の所有していた農業機械・機具類には、1872～74年にケブロンが輸入したものが多く含まれ、「官園」の焼き印や当時の写真で確認できるものが10点あるほか、この2つの農業機械リストに挙げ

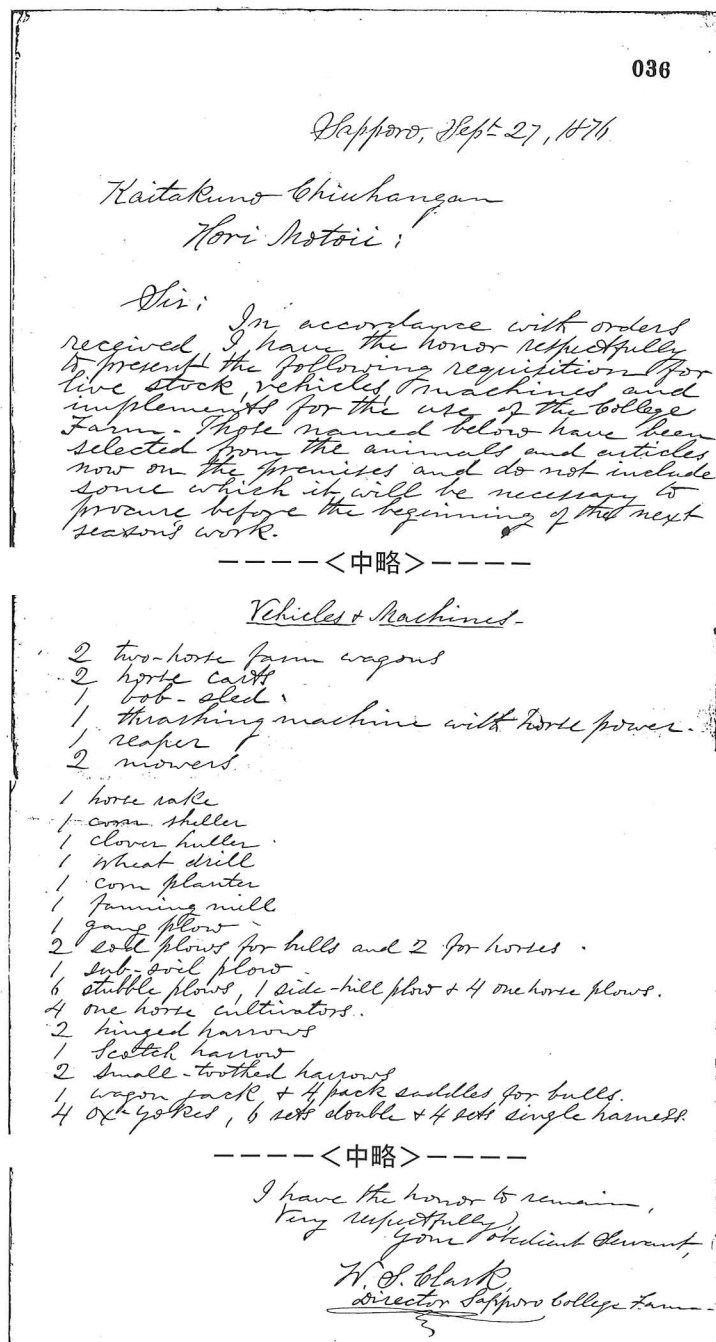
られている機械に該当しそうなものも多数あります。

ブルックスが輸入した農業機械

1877年2月にブルックス教授が着任し、同年10月22日には、乳牛・農業機械・種子・化学肥料のアメリカからの輸入を申請しています。これには15点の農業機械が挙げられており、既に帰国しているクラーク博士に購入を依頼する旨記載され

ています。また、翌1878年3月には、10種15点の農業機械を含む輸入希望品の購入を、一時帰国しているホイーラー教授に依頼したい旨の申請も出されています。これらに該当しそうな機械も現存していますが、それと特定するには至っていません。

1887年9月21日には、農学校博物館に収蔵するためとして、17点の農業機械の輸入要請書が当時の佐藤昌介学長宛に提



クラーク博士が開拓史中判官堀基に宛てた
家畜・農業機械・機具の移管要請書（1876.9.27）

出され、翌年3月20日付けで、その収蔵報告書が同学長宛に提出されています。後者のリストには18点の農業機械が含まれ、要請書のそれとは必ずしも一致していませんが、このリストには機械メーカー名などを含んだ名称のものがあり、現存する6点の農業機械が特定できています。当時の農業機械はフレームなどの主要構造部が木製のものが多いのですが、輸入されてそのまま使用されずに博物館に収蔵されたと思われるものが多く、ほぼ完全な形で残っています。フレームに「W. P. Brooks Sapporo」との宛名がそのまま残っているものもあります。

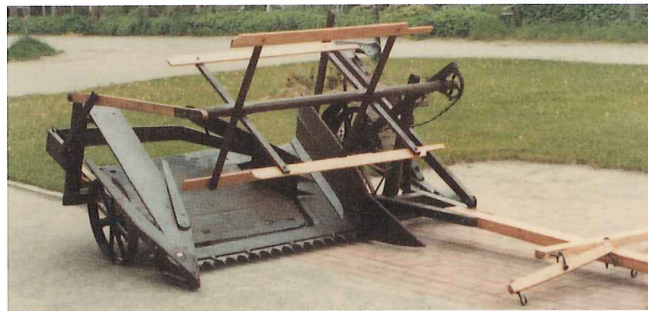
輸入農業機械が果たした役割

これら札幌農学校で使用あるいは輸入した農業機械はそのほとんどがアメリカ製のものです。当時の日本の農業は人力作業を主体とした農業で、ケブロンやクラークが導入した家畜を動力として使う「畜力農業」はまったく未経験といっ

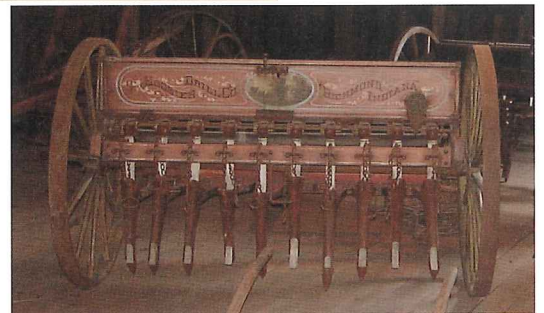
て、後年日本一となる酪農・畑作を育てたのはケブロン、クラークを代表とするいわゆる「お雇い外国人」達でしたし、現在、経営面積で府県の15倍以上という大農経営を北海道にもたらしたルーツこそ、彼ら

が輸入しその使い方を指導した輸入農業機械であったといえます。

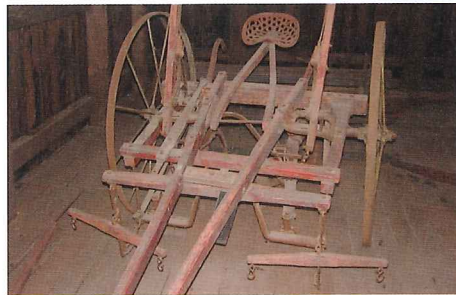
端 俊一
(モデルバーン等の一般公開に関する専門委員会委員長/農業機械学)



ケブロンが1871年頃に官園に輸入し、クラーク博士の要請で1876年に農学校農場に移管したリーパー(麦収穫機) (1986年に補修復元)



博物館用として1887年に輸入されたフージアードリル(麦用条播機)



博物館用として1887年に輸入された2頭曳きカルチベータ(W. P. Brooks Sapporoの宛名書き有り)

Handwritten letter in Japanese and English:
Sapporo, March 20th, 1888
Dr. W. Sato, Act. Director
Sapporo Agr. College
Sir: In compliance with your request I send you herewith a list of the Agr. implements added to the museum during the year 1887. The exact price in your
-----<中略>-----
Respy yours, Wm. P. Brooks

Handwritten list of machinery and implements added during 1887:
Machinery & Implements added during 1887
to Sapporo Agr. College Museum
Advance Reaper - - - - - \$140.
Seed Sower - - - - - 12.
Corn Ring Sheller - - - - - 15.
Hand Broadcast Seed Sower - - - - - 6.
Vegetable Cutter - - - - - 30.
U. S. gold \$203

Taylo's Horse Rake - - - - - \$20.25
Smith's Hand Plow - - - - - 15.
Deere Plow - - - - - 15.
A. W. " - - - - - 22.
Double Wheel Hand Plow - - - - - 8.
Double Michigan Plow - - - - - 50.
Knapp's Side Hill Plow - - - - - 12.60
Kornier's Chain Drill - - - - - 77.
Square Harrow - - - - - 10.60
Keystone Disc Harrow - - - - - 42.
Deere Cultivator - - - - - 2.10
New Matchless Cultivator - - - - - 37.50
Champion Fan Mill - - - - - 26.25
U. S. gold - - - - - \$520.45
Bot. A delivered to College in April or May, 1887.
" B " " " " Jan. 1888.

ブルックスが佐藤昌介学長に宛てた博物館収蔵品報告書(1888.3.20)



博物館用として1887年に輸入されたディスクハロー(Keystone社)(その後使用されたのか木部が交換されている)



博物館用として1887年に輸入されたプラウ
左: Chilled Plow (Deere社)
右: Hill-side Plow (Knapp社)

サハリン考古学の最前線

サハリンは私の生まれ故郷です。それについて書くのは喜びであり名誉であります。このような素晴らしい機会を与えてくださった編集スタッフに感謝します。またこの魚の形をした素晴らしい島とその過去を私の目を通してあなたがたに見ていただきたいと思います。北海道民がサハリンに寄せる興味は私には理解できません。サハリンの人たちも北海道に興味をもっています—あなたがたの島から私たちのところへ春の暖かさが訪れます。アジア大陸と日本の島を結ぶ巨大な橋というサハリンの役割を決定したのは自然そのものなのです。私たちの島の歴史も日本の歴史にとって大きな意味をもっています。お目にかけます論文は長くありません、20世紀末のサハリンの最も重要な発見の記述に限定します。

センナヤ1遺跡 (図1:1)

サハリン最古の遺跡はドーリンスク地区センナヤ川にある。その遺跡には複数の文化層があり、年代は旧石器時代の前期と中期の境である。遺跡の名前は同名

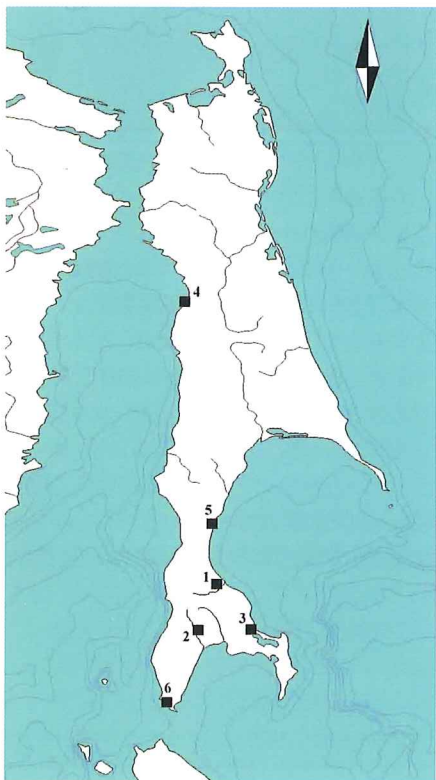


図1 本文中で言及する遺跡

の川からつけられた。遺跡は、ナイバ川とレピャジャ瀉の河口地帯、標高50メートル前後の中期更新世の海岸段丘上にある。そこには20万年前から15万年前にかけてのある時期に、人間が住んでいた。このことは、奈良教育大学の長友恒人教授と大学院生下岡順直によって行われた蛍光X線分析による一連の年代推定によって、証明されている。

発掘区の深さは1.5~2.25mである。珪岩やフリントからなる非常に風化の進んだ遺物が、調査の行われた9層のうち第8層で発見された。上部の3層には、前期旧石器時代の様相を呈する礫石器と共に、後期旧石器の遺物も発見された。すなわちパンチを使って剥離された小型の剥片、石刃製ナイフ、打撃面に調整が加えられた石核、背部の付いたナイフである。

第3-7層では外見がアシュールームステイ工型の礫石器が発見された。そこには以下の遺物が含まれる。搔器、五角形の尖頭器、弓形（ミカンの小房の形）をした石器で彫刻用および切断用の刃をもつもの、打撃面に調整が加えられていない礫石核、剥片、削片などである。ここではアシュール型やアシュール・ムステイ工型の弓形の石器と同時に、円盤状の石核（搔器）やほぼ角柱状の石核も地表で発見された。

遺物リストと剥離技術に関して次の特徴が挙げられる。

- 1 珪岩の石器は多数あり、フリントや頁岩の希に出土する石器と比べて、古い様式の石器に見える。
- 2 円礫を細かく割ることは、原則として打撃面に調整を加えずに行われていたが、それゆえに大量の不合格品が出た。
- 3 石器の大半は一本のシナリオに従って製造された—円礫は弓形に叩き割られ

たのである。弓形の下部には円礫の硬い表層が残っていたが、そのおかげで人間の手は道具を用いて作業する際に外傷から守られていた。細かく割って得られる弓形の道具の鋭端は、通常、そのまま利用された。しかしなかには打撃による両面の加工の跡や一定方向に剥がされた跡が残っているものもある。すなわちそれらは、彫器製造のための彫刀面の作出や、使用不能になった石器を再生させるための平行剥離面の作出に適用された手法を示すのである。幾多の石器には、仕上げ加工に利用された跡がある。

遺跡の位置と搔器、握斧、彫器、ナイフといった一揃いの石器、そして大量の不合格品—砕けた石は、この遺跡が特定の季節に利用されたのであり、オホーツク海岸付近の河岸に位置する石器製作・修理の作業場であったと解釈することが可能である。

アガンキ5遺跡 (図1:2)

サハリンにおけるホモサピエンスの揺るぎ無い発展は2万年前の時期、つまりヴュルム氷河の最も冷え込んだ時と関連する。後期旧石器時代、人間の居住地は河川流域にあった。例えば、アガンキ5遺跡は、同名の村の近く、リュータガ川の渓谷に位置する。放射性炭素年代測定法によると、人々が初めてこの地にやってきたのは後期旧石器時代の初め—B.P.31130±440だと推定することが可能である。次の段階（B.P.19440±140—17860±120）に集落がつくられた。1994—96年に2軒の平地式住居址が発掘された。遺物は明瞭に限定された円の枠内に集中していた。粘土層中の腐植質の薄い凸型レンズ状の層は当時の住居床の名残である。炉の穴には木炭と燃えかす



図2 ハート形バイフェイス



図3 サイドスクレーパー

が詰まっていた。遺物には大形の石刃や、石核、細石刃、舟底形石器がある。サケ・マス類を模した石製の像は、後期旧石器時代の人々の生活に漁労が占める位置を示す。この遺跡にはサハリンの砂浜で集められた琥珀や白滝村を産地とする黒曜石が見られる。

セディフ コンプレクス (図1:3)

非常に興味深いのがオホーツク村の周辺である。そこにはオホーツク海とつながる湖の沿岸地帯に古代の集落遺跡が約20箇所集中している。なかでもセディフコンプレクスが最も研究されている。そこには古代の定住地が11箇所、要塞集落と埋葬遺跡がある。それらは淡水湖セディフとトンナイ瀉の間の素晴らしい針葉樹林の中に位置する。住居跡の窪地は地表にはっきりと見え、約1600の住居が発見された。我々が発掘した8軒の住居のうち3軒は新石器時代 (B.P.4220±55-3760±40) のものである。それらの住居は楕円形で、中央に炉があり、床に食糧貯蔵用の穴が作られている。土器は平底で、最大径が胸部に位置して口縁部に向かって縮約するため、全体に樽形の器形を呈する。粉碎した貝殻を混ぜた胎土で作られている。貝殻の端で付けられた波形曲線や、沈線で描いた螺旋の文様がよく知られている。文様の個々の構成は、アムール下流ヴォズネセノフカ文化の土器に見られるものを忠実に再現している。この類似性は石器にも認められる。

このころ1軒は鈴谷文化に属する住居址と、後期オホーツク文化の六角形の大きな家4軒である。最も大きなものは以下の規模である—11×10m、床面積88m²、壁の全周28m / (6×2) + (4×4)、旧地表面からの深さ0.8-1m以下である。住空間を形成する、四角形のログハウス構造が、はっきりと刻み付けられている。床は密に詰まったかたい砂で、石のように踏み固められていた。小屋組み—建物の隅に立てられた頑丈な柱であり、骨組みの構造の基礎をなす—を支えていた隅もはっきりと見える。この家は中央にある大きな炉によって暖められていた。2軒の家では中央の炉と同時に電をもっていた。電は通常住居の壁部にあった。電は、粘土を塗った細枝の骨組みを軸にして造られた。電はオホーツク文化では後期に導入され、南貝塚段階の最後に擦文文化の影響のもと現れた。つまり12-13世紀のことであった。

セディフ湖のそば、上で述べた家の近くに、土壇墓が発見された。そのなかには火葬による埋葬が少なくとも3基ある。

そのうち2基はオホーツク文化の人々によって家の建設の際に著しく破壊されていたが、1基は完全に残っていたので、断面と水平面ではっきりと確認できた。

墓壇は、斑状になった、有機物を多く含む土壌の集中によって確認された。長軸は南西—北東方向で、170cmである。短軸は北西—南東方向で、70cmである。有機物を含む土壌は、赤黄色の砂の層に10-20cm入り込んでおり、中心部には炭の下に灰色ポドゾルのレンズ状の薄層を見ることができる。清掃すると円形の穴が現れた—おそらく墓で火葬の残りを再び焼却した跡だろう。中央部付近に柱穴が二つある。一つは中心部のすぐ近くにあり、もう一つはそこから幾分西に離れたところにある。

層を精査するとひどく焼けた小さな骨が5本出てきた。そのうちの一本は人間の足の趾骨を思い起こさせる。青銅製・浮彫の装飾品を除いて遺物はなかった。1994年シューピナはオホーツク文化のペラカーメンナヤ城塞集落 (初子浜チャシ) に同様の墓を2基発見することに成功した。この埋葬遺跡の発見によって、10-13世紀に仏教伝統の影響のもと生じた火葬の儀式が、サハリンにまで広まったと考えることが可能になった。だがこの墓がオホーツク文化にどのように関連するものなのか現在のところまだ不明である。それらが異集団のものである可能性も否定できない。これら火葬は、二例ともが要塞地区の近くで発見されていることからみて、大陸からやって来て非業の死を遂げた戦士たちのものであるのかもしれない。

墓の帰属する文化や年代を確定するには、発見された青銅の製品が重要な意味をもつ。本論に添付した論文でこれらの遺物の詳細な記述をおこなうことにしよう。

埋葬遺跡から北へ約0.2kmのところ、中世の遺構がもうひとつある。それは要塞の壁と壕であり、セディフ湖とその小流の間に造られた。この遺構はさらなる研究を要するが、現段階でも幾つか意見を述べることはできる。この建造物の建設は古代に中止され、未完のままである。壕は壁よりも南に位置する。したがってこの施設では、敵の侵入は北からではなくて、南のトンナイチャ瀉の方角を想定したものであった。壕を造る際に電付きの住居が壊された。このことから壕の建造年代は13世紀以降だと推定することができる。とはいえ建造物がどの文化に属するかは今のところ不明である。島外からの人のものなのか、その土地の中世の

人々のものなのか、可能性は五分五分である。サハリンではこのような建造物は、アレクサンドロフスク (図1:4) やプガチョヴォ (馬群潭) (図1:5)、クリリオン (白主) (図1:6)、の防衛性集落址の例で良く知られているだけに、なおさらである。現在これらの遺跡は、日ロ両国の考古学者や歴史学者によって研究が行われている。このテーマに関する最初の出版物が近く刊行されるだろう。

現在サハリンには考古学的に意味のある遺跡が千以上知られている。サハリンの考古学研究は、130年の歴史をもち幾つかの成功を収めた。そのことは非常に重要な意味をもっているが、まだ最初の一步が成し遂げられたにすぎない。主要な発見は今後に残されている。

文 献

- 1 ワシリェフスキー, A. A. 「大陸から島地への移動地帯における文化史のプロセスがもつ特徴 (サハリン島、原始時代)」『郷土史研究紀要』1993、第4号、56-69頁
- 2 ワシリェフスキー, R. S. 『太平洋極北地帯の古代文化』ノボシビルスク、ナウカ、1973
- 3 ワシリェフスキー, R. S.、ゴールペフ, V. A. 『サハリンの古代集落址 (鈴谷遺跡)』ノボシビルスク、1976
- 4 ゴールペフ, V. A.、ラヴロフ, E. L. 『サハリン石器時代』ノボシビルスク、ナウカ、1988、240頁
- 5 ガルプノフ, S. V.、プロコフィエフ, M. M. 『モノロン島の考古遺物』ユジノサハリンスク、1994
- 6 コーズイレフ, R. V. 『古代サハリン』レニングラード、1967
- 7 『サハリン州史跡と文化遺跡集成のための資料』編集: A. I. クルシャノフ他、ユジノサハリンスク、1983
- 8 サマーリン, I. A. 『モノロン島の歴史』ユジノサハリンスク、1996
- 9 タクサミ, Ch. M.、コーサレフ, V. 『アイヌよ、あなたがたは何者なのか? 歴史と文化の記述』モスクワ、ムィスリ、1990、318頁

ワシリェフスキー, A. A.
(サハリン大学教授・
北海道大学総合博物館客員教授/考古学)

2000年セディフ集落址の発掘区3で発見された4つの青銅製遺物



図4-1 飾り金具1 E-3区、第1層

芝土のすぐ下、灰色砂壤土層の中、調査区中央でつぶれた南貝塚式土器の近くに、アムール型の矩形・青銅製の帯飾り金具（図4-1）の一部が発見された。この遺物は浅浮き彫りの鑄造の技術によって作られた。厚さ2.3mmである。透かし細工と線による模様で飾られている。最上端の「房飾り」、水平方向の溝、半円形や十字形の透かし彫りをもつ。右辺と下辺は切断されており、これが飾り金具として再利用されたことを物語っている。



図4-2 飾り金具2 Γ-2区、第2層

つぶれた南貝塚式の大きな土器や鋸で挽かれた木片がある層に、アムール型の矩形・青銅製の飾り金具（図4-2）が発見された。この遺物は浅浮き彫りの鑄造の技術で作られていた。厚さ2.3mmである。透かし細工と浮き彫り模様で飾られている。飾り金具の下部は残っていない。模様の構成は3つのゾーンからなる。上部は楕円形の6つの透かし彫りもち、中部は水平方向の3列の溝に挟まれた正十字形の透かし彫りをもつ。ここで記述されている装飾品に完全に合致する遺物が、A. П. オクラードニコフと B. E. メドヴェージェフによって（アムール州）アムール川中流域トゥングスカ河口の金国時代の女真系集落地への探検の際に発見された。¹⁾



図4-3 飾り金具3 Γ-2区

青銅製の象形飾り金具（図4-3）である。長さ78mm、厚さは1.2mmである。この遺物は浮き彫りの植物模様で飾られている。木の枝が幹から左右両方向に斜め上に広がる様子が様式化されている。反復する模様で飾られた表面の上部と下部右側に、枝を縁取る突起したゾーンによって描写される葉を探し出すことができる。当該模様は生命の木を象徴化している。生命の木の画は、沿海地方やアムール流域の中世初期の諸文化においてきわめて広く知られていた。遺物の縁の性質から判断して、飾り金具は初めはもっと大きかったと結論できる。その正確な形とサイズを想像することは可能だが、推測の域を出ない。



図4-4 飾り金具4 区画B-5区、第2層

菱形の青銅製装飾品（図4-4）である。下部へ向かうにつれて尖っている。長さ75mm、幅63mm、厚さ1.5-2.5mmである。模様は、構成上、同心円の反復模様の2つのゾーンからなる。内側ゾーンと外側ゾーンである。中央では三角形と菱形の透かし彫りの対が十字形に向かい合う。外側の模様の空間は、中心から胴体の端に向かって広がる線に3個ずつ付けられた全部で12の真珠文（突瘤文）によって、4面に分けられている。真珠文で区切られた細長・弓形の透かし彫りが、中

央部を環状に三重に取り囲んでいる。最上部には楕円形の透かし彫りの付いた矩形のホルダーの輪がある。この装飾品の胴部の表裏には、鑄造後に鋭利なもので付けられた深い溝が見られる。

このような装飾品はアムールの女真文化（パクローフカ文化）に見ることがができる。9世紀末から11世紀初頭のものと考えられる。²⁾

飾り金具の年代学と文化的帰属

E-3区第1層およびΓ-2区第2層で発見された青銅の飾り金具は、10-13世紀初頭³⁾のものと考えられる。このことは、東アジア史の王朝の時代区分では、遼国（916-1125）と金国（1115-1234）の時代に相応する。この年代推定は、サハリンにおける南貝塚式土器の型式（10-13世紀初頭）によっても裏付けられる。⁴⁾

飾りの付いた帯はかつて西はハンガリーから東は太平洋まで広く使用されていたが、幾つかの民族では近代に至るまで民族衣装の装飾として続いた。最も流布したのは中世初期の時代、中央・東アジアにおいてであった。サハリンに隣接する地域では、沿海地方やアムール流域、日本北部などの考古学上の諸文化において、このような遺物の発見がよく知られている。類型学的には、セディフ集落址1で発見されたものはアムール型の飾り金具に属する。その登場は紀元後千年紀半ばから2千年紀の初めの中国北東地方やロシア極東南部の靺鞨文化の最盛期と関係する。⁵⁾ 中世の文献史料や現代の文献ではこれらの帯飾の様々な機能が指摘されている。幾つかの国々で帯飾は社会・政治・軍事の階級制度において帯飾の所有者の地位を識別する言語外手段の役割を果たしていた。⁶⁾ そのような帯の所有者は伝統的な祭式の奉仕者（シャマン）でもありえた。⁷⁾ 一揃いの飾りの付いた帯、あるいは帯の個々の備品（飾り金具、下げ飾り、円形飾り、小鈴）は、靺鞨族や彼らと同種の女真の埋葬においてしばしば副葬品となっている。⁸⁾ サハリンでアムール型の帯飾り金具が発見されたのは初めてのことだ。上で指摘された、オホーツク文化の集落のひとつである防御性集落ベラカーメンナヤでは、チュルク型の帯飾り金具の発見が良く知られている。チュルク型は極東地域ではアムール型と共存していた。⁹⁾

オホーツク文化の遺跡にアムール型の飾り帯が存在しているのは、島民とアムール流域の諸民族との交易や政治上のつながりを示しうるものであり、また同様に金帝国行政府の影響が1120年代から北東の

スナガリ川やアムール川の下流へ拡大したことも関係する。¹⁰⁾

これら4つの遺物は火葬された人々とともに葬られたこと、そのことは靺鞨の伝統に一致することが考えられる。4つのうち3つは、12-13世紀オホーツク文化の人々によって住居建設の際に掘りあげられた土層から出土している。

註

- 1) オクラードニコフ, A. P., メドヴェーヂェフ, E. 「トングスカ河口の女真集落址」『考古学探求 (北アジア)』ノボシビルスク, 1980, 126-127頁, 図2
- 2) メドヴェーヂェフ, E. 「ドゥバヴォーエ村の埋葬遺跡—アムール中流域における初期女真遺跡」『考古学探求 (北アジア)』ノボシビルスク, 1980, 187-189頁, 188頁の図57
- 3) メドヴェーヂェフ, B. E. 『コルサコフの埋葬遺跡: 年表と資料』ノボシビルスク, 1991, 30頁; 王培新「靺鞨—女真系銅帯飾及相關問題」『北方文物』1997, 第1号, 24頁(中国語); USUKI Isao, "Mokhe-Jurchen type rectangular belt ornaments" Far Eastern History and Archaeology, 2000, 186-192頁
- 4) ワシリェフスキー, A. A. 「現代の研究におけるオホーツクの問題(サハリン, 北海道, クリル諸島, 1980-90年代)」『サハリン国立大学学術紀要』2000, 第1分冊

- 5) 菊池俊彦「オホーツク文化に見られる靺鞨・女真系遺物」『北海道大学, 北方文化研究』札幌, 1976, 31-117頁(日本語); チャコフ, O. B. 『プリモリーエの靺鞨遺跡』ウラジオストーク, 1988; 天野哲也「オホーツク文化期北海道島にもたらされた帯飾板の背景」『北方史の新視座—対外政策と文化』雄山閣, 1994, 45-73頁
- 6) チェレヴァンコ, E. И. 『プリアムリーエの諸種族の軍事概論』ノボシビルスク, 1987, 71-77, 115頁
- 7) 王培新「靺鞨—女真系銅帯飾及相關問題」『北方文物』1997, 第1号, 27-28頁
- 8) メドヴェーヂェフ, B. E. 「ナデジュジンスコエ村の埋葬遺跡の発掘資料」『シベリア, 中世の中央および東アジア』ノボシビルスク, 1975, 113-142頁; チェレヴァンコ, E. И. 『トロイツキー埋葬遺跡』ノボシビルスク, 1977; メドヴェーヂェフ, B. E. 『千年前から二千年初めのプリアムリーエ: 女真時代』ノボシビルスク, 1986; メドヴェーヂェフ, B. E. 『プリアムリーエのクルガン』ノボシビルスク, 1998; チェレヴァンコ, A. П., ボグダーノフ, E. С., ネステロフ, S. P. 『ナイフェリト墓地遺跡』ノボシビルスク, 1999; 天野哲也「靺鞨」社会の特徴—コルサコフ墓地の帯飾板を中心に—『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館, 1995, 571-599頁
- 9) シューピナ, O. A. 「サハリン南部の防御性集落ペラカーメンナヤ・チャシに古代の

人々が入植した段階」『サハリン博物館通報』第6号, ユジノサハリンスク, 1999, 240頁
10) 干志耿・孫秀仁『黒龍江古代民族史綱』黒龍江人民出版社, ハルビン, 1986, 389頁(中国語)

ワシリェフスキー, A. A.
(サハリン大学教授・北海道大学総合博物館客員教授/考古学)

デチャーヒン, O. И.
(サハリン大学研究員/中世考古学)
(堀越しげ子訳, 天野哲也・臼杵勲校閲)

第5回公開シンポジウム

当館では、第5回公開シンポジウム/文部科学省研究費補助金(基盤研究(A)(2)代表天野哲也)成果公開事業日ロ共同シンポジウム『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容、消滅』を2002年2月28日(木)~3月1日(金)、北海道大学学術交流会館第1会議室で開催した(共催/北海道考古学会・古代学協会北海道支部)。ここではオホーツク文化について多角的な研究報告・討論が熱心におこなわれ、また両日とも100名を越える研究者・市民の参加があった。その概要は以下のとおりである。

1日目(2/28)

「サハリンにおける調査研究の現状」

司会/前田潮(筑波大学)

討論者/平川善祥(北海道開拓記念館)、
V.デリュージン(東京大学大学院)

1. 「サハリンの縄文文化バリエーション—アニク文化」A.ワシリェフスキー(サハリン大学)
2. 「チルコーヴァ-1多層遺跡」I.サマリン(サハリン州郷土博物館)
3. 「1993年におけるサハリン・ウスチアインスコエ遺跡の調査」山浦清(立教大学)・前田潮(筑波大学)
4. 「丸底・突瘤文をもつ土器をともなうテルペニヤ湾北岸のグループ」V.フェドルチュク(サハリン大学)
5. 「考古学コンプレクス—クズネツォーヴォ1遺跡(1979-2001年の調査の成果)」P.カシツィン・V.グリシェンコ(サハリン大学)
6. 「2000-2001年サハリン南部オホーツコエ3古代集落址の考古学調査」O.シューピナ(サハリン州郷土博物館)
7. 「サマルガ流域における考古学調査」V.チャーコフ・O.チャーコヴァ(ロシア科学アカデミー極東支部ウラジオストーク)
8. 「アムール河下流アエロポルト遺跡 竪穴住居址の出土資料」臼杵勲(文化庁)・熊本俊郎(東京大学)

PPO ASIA 国際シンポジウム

2002年9月5-7日 Amalgamation of Precambrian Blocks and the Role of the Paleozoic Orogens in Asia (PPO-ASIA) 『先カンブリア代の地質ブロックの融合と古生代造山活動の役割』と題した国際シンポジウムを理学研究科地球惑星科学専攻と共同開催した。このシンポジウムは故渡辺暉夫教授が企画し、日本学術振興会に申請して承認されたものである。まことに残念なことに氏は本年5月に事故のため亡くなったため、これは氏を追悼するシンポジウムとなった。海外8か国からの20名以上を含むおよそ60名近くの内外の地質学・構造地質学・古生物学研究者が、地理的には南極からシベリア北部まで、時代は太古代の30億年前から古生代末の2億5千万年前までの、総数50以上のテーマについて口頭発表およびポスターセッションの場で熱心な講演・討論を行った。セッションの後には、出席

者20名余りと一般市民を含む計45名が、有珠火山・洞爺湖カルデラへの巡検に参加した。なおこのシンポジウムの成果は、2003年中に出版予定である。



2日目 (3/1)

第1部 「サハリン考古学の諸問題」

司会／山浦清 (立教大学)

討論者／右代啓視 (北海道開拓記念館)

9. 「ススヤと縄文文化」 A. ワシリェフスキー (サハリン大学)

10. 「鈴谷期の銛頭」 前田潮・内山幸子 (筑波大学)・諸留佐織 (札幌大学)

11. 「「鈴谷文化」の形成について」 小野裕子・天野哲也 (北海道大学)

12. 「オホーツク文化の形成—十和田式をさかのぼる—」 天野哲也・小野裕子 (北海道大学)

第2部 「オホーツク人の生活と環境」

司会／辻誠一郎 (国立民俗学博物館)

討論者／山田悟郎 (北海道開拓記念館)、長田英己 (沖縄県公衆衛生協会)

13. 「遺跡出土アスファルトの起源とサハリン」 小笠原正明 (北海道大学)

14. 「オホーツク文化の動物利用について—プロムイシロヴォエフ遺跡 (東多来加)を中心に—」 内山幸子 (筑波大学)

15. 「人骨から生活を読みとるa. 礼文島浜中2遺跡出土オホーツク文化期人骨に見

られた古病理学的所見」 石田肇 (琉球大学)・埴原恒彦 (佐賀医科大学)・近藤修 (東京大学大学院)・大島直行 (伊達市教育委員会)・松村博文 (札幌医科大学)

16. 「b. オホーツク人の歯の微咬痕、強度咬耗と顎関節の変性について」 小寺春人 (鶴見大学)・小野裕子 (北海道大学)

17. 「南サハリンの環境史と高精度編年」 辻誠一郎 (国立歴史民俗博物館)

18. 「オホーツク周辺に見るシマフクロウの過去の生息環境：アイヌにおける高位神起源の検討」 竹中健 (シマフクロウ環境研究会)

19. 「北海道礼文島香深井遺跡出土のヒグマ遺存体に関する古代DNA分析：オホーツク文化のクマ送り儀礼の起源について」 増田隆一・天野哲也・小野裕子 (北海道大学)

20. 「サハリン南西部カリーニナ1 (多蘭泊)・同2遺跡およびイワーノフカ (武意泊) 遺跡資料について」 S. ガルブノーフ (ティモフスコエ博物館)・天野哲也 (北海道大学)

なお、予稿集 Okhotsk Culture Formation, Metamorphosis and Ending の作成と当日の通訳には次の方々にご協

力頂いた。

井上紘一・加藤博文・福田知子・堀越しげ子・オイドフ バトバヤル・ロバート クルツ (以上北海道大学)・金賢善 (アース・サイエンス社)

北海道大学総合博物館

第1回企画展示

「キャンパスに咲く草花」

2002年5月10日～6月14日総合博物館1階“知の統合”コーナーを利用して、第1回企画展示を開催した。総合博物館開設に際して、増淵法之本学名誉教授から寄贈を受けた、100点の水彩画の中から、28枚を選び展示すると同時に、本学における植物学研究所の歴史の一端を展示するという、ユニークな展示であり、好評を博した。

また、6月10日には増淵名誉教授による「自然史」と題した本草学の歴史を中心とした講演を、第22回総合博物館セミナーとして開催した。

展示担当：箕浦・高橋



平成14年1月1日から平成14年9月末日までの主な出来事

平成14年	6月	7日	大学祭に伴う札幌農学校第2農場臨時公開 (6月9日まで)
1月 15日	6月	8日	大学祭に伴う総合博物館臨時開館 (6月9日まで)
1月 22日	6月	21日	第5回国立大学博物館等協議会 (東京芸術大学)
1月 29日	6月	25日	岐阜県立多治見北高等学校生徒見学 (168名)
2月 27日	6月	28日	岐阜県立多治見北高等学校生徒見学 (170名)
2月 28日	7月	1日	客員教授 S. マズール氏着任
総合博物館第5回公開シンポジウム 「サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅」 (3月1日まで)	7月	5日	七飯町歴史館友の会会員一行見学 (35名)
4月 1日	7月	9日	白石区北白石連合会婦人部一行見学 (36名)
平成14年度総合博物館研究生入学「星野フサ・指導教官—高橋教授」	7月	10日	総合博物館撮影取材依頼 札幌市経済局観光コンベンション部 (案内 女優 中井貴恵)
4月 13日	7月	23日	北京科技大学 副校長一行見学
総合博物館第2土曜日臨時開館 (平成15年3月まで) 第1回土曜市民セミナー開始	8月	9日	札幌市東区PTA連合会一行見学 (52名)
4月 17日	8月	13日	総合博物館開館後入館者50,000人達成
客員教授 A. ワシリェフスキー氏帰国	8月	31日	札幌農学校第2農場撮影取材依頼 NHK北海道ビジョン (案内 女優 宮崎美子)
5月 10日	9月	5日	PPO ASIA 国際シンポジウム共催 (9月7日まで)
総合博物館第1回企画展示 「キャンパスに咲く草花」 (6月14日まで)	9月	10日	深川市立深川小学校生徒見学 (10名)
5月 13日	9月	11日	虻田町立虻田小学校生徒見学 (5名)
総合博物館ボランティア活動員募集 (エコキャンパス 基礎調査・考古標本・昆虫標本・地学標本・植物標本・ 展示解説員・リーフレット翻訳)	9月	14日	「大学 Jr. サイエンス&ものづくり」講演会及び野外 観察会実施
5月 23日	9月	24日	北海道札幌聾学校生徒見学 (14名)
5月 31日			
小樽市博物館一行見学 (40名)			
5月 5日			
国立長岡工業高等専門学校生徒見学 (49名)			

今年1月から9月までにおこなった各種セミナー

第14回 北大総合博物館セミナー

「考古学から見た北海道の17世紀」

小野 哲也

(文学研究科北方文化論講座・博士課程)

日時：1月28日(月曜日) 14:00～15:30

第15回 北大総合博物館セミナー

「コンピュータ古生物学～3D-CGを使った変形復元」

越前谷 宏紀

(理学研究科・地球惑星科学専攻地層解析科学グループ・博士課程)

日時：2月19日(火曜日) 14:00～15:00

第16回 北大総合博物館セミナー～第2回公開セミナー

「日本の南極観測－探検から科学調査の時代へ－」

1. 「日本の南極観測研究の概要」白石 和行(国立極地研究所)
2. 「世界最古(約40億年前)の岩石が眠る南極の地質と Gondwana 超大陸の復元」白石 和行(国立極地研究所)
3. 「南極大陸に隕石を求めて」小島 秀康(国立極地研究所)
4. 「南極陸上生態系－極限環境の生き物たち」伊村 智(国立極地研究所)
5. 「アザラシ・ペンギンは何故深く潜るのか？」佐藤 克文(国立極地研究所)
6. 「南極のオゾン・ホール」忠鉢 繁(気象庁気象研究所)

日時：3月15日(火曜日) 13:30～17:30

第17回 北大総合博物館セミナー～土曜市民セミナー

「ニュージーランドの博物館と自然」

大原 昌宏

(総合博物館・博物館情報メディア研究系・助教授)

日時：4月13日(土曜日) 13:30～15:00

第18回 北大総合博物館セミナー～土曜市民セミナー

「北大キャンパスの植物(野外観察会)」

高橋 英樹

(総合博物館・資料基礎研究系・教授)

日時：5月11日(土曜日) 13:30～15:00

第19回 北大総合博物館セミナー～佐伯有清先生頌寿記念論文集出版記念講演会

「サクシュコトニ川遺跡(北大構内)出土の『夷』字のその後」

佐伯 有清

(元北海道大学文学部・教授)

司会：関口 明(札幌国際大学・教授)

日時：5月11日(土曜日) 15:00～16:30

第20回 北大総合博物館セミナー

「葉潜りのスペシャリスト～ホソガ科昆虫について」

久万田 敏夫

(元北海道大学農学部・教授)

日時：5月28日(火曜日) 14:00～15:30

第21回 北大総合博物館セミナー～土曜市民セミナー

「『黄金の国ジパング』－温泉が生み出す金鉱床－」

松枝 大治

(総合博物館・資料開発研究系・教授)

日時：6月8日(土曜日) 13:30～15:30

第22回 北大総合博物館セミナー

「自然史」

増淵 法之

(北海道大学・名誉教授)

日時：6月10日(月曜日) 14:00～16:00

第23回 北大総合博物館セミナー～第3回公開セミナー

「北大の生物多様性研究－分類学からのアプローチ(1)－」

1. 「北の魚、カジカ類の種多様性」
矢部 衛(水産科学研究科・総合博物館資料部)
2. 「ハエは飛んだ、ヒマラヤからロッキーへ」
諏訪 正明(農学研究科・総合博物館館長)
3. 「種分類と体系分類」
馬渡 峻輔(理学研究科・教授)
総合司会：高橋英樹(総合博物館・資料基礎研究系・教授)

日時：6月26日(水曜日) 13:30～16:00

第24回 北大総合博物館セミナー～土曜市民セミナー

「地球の歴史と化石」

箕浦 名知男

(総合博物館・資料開発研究系・助教授)

日時：7月13日(土曜日) 13:30～15:00

第25回 北大総合博物館セミナー

～日本動物学会北海道支部第487回講演会

「台湾の自然と動物地理について」

押田 龍夫

(台湾東海大学生物学系・客員教授)

日時：7月17日(水曜日) 15:00～16:30

第26回 北大総合博物館セミナー～土曜市民セミナー

「マレーシアの海藻調査」

阿部 剛史

(総合博物館・博物館情報メディア研究系・助手)

日時：8月10日(土曜日) 13:30～15:30

第27回 北大総合博物館セミナー

「林床植物個体群の存続を脅かす要因-オオパナノエンレイソウの保全生物学-」

富松 裕

(地球環境科学研究科・生態遺伝学講座・博士課程)

日時：8月20日(火曜日) 14:00～15:30

第28回 北大総合博物館セミナー

～土曜市民セミナー、大学Jr.サイエンス&ものづくり

「北海道大学キャンパスにみる自然と人間の歴史(野外観察会)」

講師 小宮山 英重(野生鮭研究所・標津町忠類)

横山 英介(森町教育委員会)

天野 哲也(総合博物館・資料基礎研究系・助教授)

日時：9月14日(土曜日) 13:30～17:00

北海道大学総合博物館ニュース 第6号

北海道大学総合博物館ニュース

発行日：2002年(平成14年)11月・発行者：諏訪正明

発行所：北海道大学総合博物館

住所：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

電話：011-706-2658・FAX：011-706-4029

E-mail：museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp

http://www.museum.hokudai.ac.jp/

印刷：興国印刷株式会社